

昭和31年6月18日第3種郵便物認可
毎月1回1日発行
定価1部15円
印刷所 田辺印刷株式会社
上田市原町 TEL (2) 1492・2566

千曲会報

編集兼発行人 小林 尚一
発行所 社団法人千曲会
長野県上田市常入信州大学繊維学部内
振替長野 6243・東京43341
電話上田(2)1215(代表)(2)1218(直通)

PPDTUと金属のみよりなる樹脂の合成

長野県小諸商業高等学校 秋山 昭夫 (化6)

本研究ではキレート結合生成のみよりの樹脂化を試みてきたチオ尿素基を1分子中に2ヶ有する、パラ・フェニレン・ジ・チオ尿素(以下PPDTU)を用いキレート結合させると樹脂化は可能であり、配位数2・4・6によって分岐度は変わってくる。キレート生成の際に、これら配位数の異なるものを混合することによって、架橋度の適当なものを作り得ることは理論的に可能な筈と思われる。しかもこの際にはキレート形成に可能な金属以外のものが混在しても影響はない筈である。この合成の特長は、室温で混合するだけでよいという長所をもつ、欠点としては高分子化に難点があり、立体の歪が蓄積されるためと思われる。熱安定性、耐水性が悪い等の点がある。本研究に於ては、樹脂化、耐水性、熱安定性を中心に検討し、次の研究を行なった。

(1) PPDTUの合成

パラフェニレンジアミンを塩酸塩にし、これにロダンアンモンを作用させてチオ尿素基を2ヶ導入した。黄色針状結晶 MP 220°C, イオウ31.7%, 窒素13.8%である。

(2) 水中に於ける樹脂化

PPDTUが水中に不溶のため不能であった。

(3) DMF中の樹脂化

PPDTU 2MをDMFに溶解し3Mの銅塩DMF溶液を室温にて混合すると合成される。この際金属のみが樹脂の形成に必要であれば同一金属については、アニオンの種類如何にかかわらず同一物が生成する筈である。併しこれらの生成物の性質はかなり異なり、IRも違っている。ここではCu(NO₃)₂が樹脂化するのみでCuCl₂は殆んど収率なく、他のCuSO₄, Cu(Ac)₂は粉末状であった。

(4) DMF+H₂O中に於ける樹脂化

水中で完全解離すれば同一金属を用いればそのアニオンの種類に無関係に同一物が得られる筈である。併し水に不溶なのでDMF 7:水3の比で行なった。したがって完全解離は出来ない。Cu(NO₃)₂, CuCl₂が樹脂化CuSO₄, Cu(Ac)₂は粉末。

以上の相違は予備実験の結果からも推測されたので、アニオンによる違いを見る為に同一カチオンを用いた。収量は定量的であった。勿論コンプレックスも含まれ、樹脂化したものはDMF単独ではCu(NO₃)₂のみであり、この様な相違はDMF中では塩の解離がおこらずCuに結合したアニオンの立体障害がPPDTUとのキレート生成に好ましいもののみが樹脂化可能と云えるようである。立体障害の小さいCuCl₂はこれに比して全く固形物生成がないことはこの事を意味している。DMF+H₂OではCuCl₂が樹脂化して、しかも硬度の大きいものが得られていることはDMF中と比較して興味がある。

なおDMFと塩との関係を調べたところ、銅塩はコンプレックスを生ずることが考えられ、これが触媒として、正なり負なりに、働くことが考えられ、それが銅塩とPPDTUの金属キレート錯体にも影響しているとも考えられる。

(5) 熱分解

Cu(NO₃)₂, CuSO₄, Cu(Ac)₂とPPDTUのDMFで反応させたもの、CuCl₂とPPDTUのDMF+H₂O中の反応物をCu(NO₃)₂, CuCl₂, 100°C, CuSO₄, Cu(Ac)₂ 120°Cで加熱する、その結果をIRで調べると、1420, 1315付近における吸収が増加するのみで大きい譲化はなく、CuCl₂についても同様である。CuSO₄, Cu(Ac)₂はもろくなり、不透明になってくる。

(6) 酸、アルカリによる加熱分解

Cu(NO₃)₂ in DMFで反応させた樹脂状物を2N HClで30分ボイルすると黄変。2N NaOHでは2~3分で黒変。HClボイルでは水ボイルと同じIRの変化で1667の減少を認められる。

(7) 加水分解

PPDTUキレートは水に不安定である。その分解条件はDMF中と、DMF+H₂O中とは当然異なると思われるのでCu(NO₃)₂樹脂をDMF, DMF+H₂O中で合成したものと、CuCl₂ DMF+H₂Oで合成したものについて水中でbp 1530, 60分ボイルしたものの水溶液中のCuイオンの検出、それに銅塩の添加による沈でん生成の有無、更に分解物にDMFを加えてボイルした生成物のIR、軟化点、その口液のCuイオンの有無その他を調べた。

(8) DMF中でのボイルによる再結合

CuSO₄ DMF中、DMF+H₂O中について2・30・60・120分ボイルしたものを調べたところ両者に大差なし。CuAc₂は両者とも分解され易く定量的変化の比を得られなかった。DMF中で2分ボイルしたのを見ると、CuAc₂のDMF中とDMF+H₂O中とは後者の方が結合が少し良い。CuSO₄のDMFとDMF+H₂OではIRの吸収の1667と1388ともに前者の方が拡大し、ボンドの形式が認められる。

(9) 加水分解後DMFでのボイル時間差によるIR変化

これにはCuSO₄ DMFで生成したキレートを水で2分ボイルして分解させ次にDMFで2, 5, 10分ボイルせしめたのを見ると1667と1620の比は少々増加するが、1388は時間と共に増加し、つぎに減少している。これからDMF中でのボイルでも限りがあることは明らかである。

(10) PPDTUの水またDMFボイル

次にIRにみられる吸収の変化がキレート化合物と関係なく元のPPDTUが同様な変化をすることもあり得るのでPPDTUを水で2分~1時間ボイルしたもの、DMF中で1時間ボイルしたもののIRを調べるとIRは完全に一致した。これはキレート結合の不安定性がキレート結合自身の不安定性と金属による分解促進作用にあるものと考えられる。

(11) 熱天秤による重量減少率と温度の関係

測定の結果、分解点等からCuCl₂ DMF+H₂O, Cu(NO₃)₂ DMF+H₂O, Cu-2(NO₃)₂ DMF中の順に熱安定性が大きいことが認められている。

結論

PPDTUと各種銅塩でDMF, DMF+H₂O中の反応にはCuイオンに結合するアニオンの影響が大きく現れる。銅イオンに結合したアニオンの大きさが適当なものはキレート形成に好ましい影響を与える。塩素、硫酸、硝酸、酢酸のアニオンの中で、DMF, DMF+H₂O中で樹脂化可能なものは硝酸イオンと塩素イオンである。加水分解により樹脂は分解

をうけるが、DMF中でボイルすると再結合して樹脂状物を再生する。この事はDMFが如同にこれらの樹脂化に重要な役目をなしているかを示している。

以上本研究は財団法人上田繊維科学振興会より研究助成金を頂く事が出来、また繊維学部当局、北条舒正教授の御援助御指導によることを深く感謝申し上げる次第である。

故林貞三先生の蚕糸功績受賞をたたえて

青 沼 茂

林先生が逝去されてはや一周忌も過ぎましたが、未だに御元氣な頃の爽快な笑い声が耳もとをはなれない。あの堂々たる体軀の先生があまりにももろく他界され、約20年近く先生の下で御世話になった私にとっては、実父を失った思いで、当時改まって先生の思い出など少しもわく気持ちになれなかった。その後先生の墓地に時折行って、在世中のことなど思い浮べているうちに、ようやくこの頃になってはじめて、一言何かかいて見たい気がしてきた。ときたま大日本蚕糸会よりの蚕糸功績受賞というしらせを耳にして、大変にうれしく感じた。いまよに見ると、先生は常に時流の行くすえを見透されていたように思える。一例を学部機構改革にとりかかれた頃のことについて述べると、製糸学を担当された先生自らが製糸学科を廃する方向を打出された。そして当時、蚕糸界一般からは甚だ無慈悲な措置のように受けとられていた。然し「いずれは大学の学科としては将来が思いやられる時が来ることは事実であるから、君等には悪いが、若いんだから、あらゆる困難を克服して再出発してくれ」と涙ながらに再三申された先生の言葉が現在実感としてひしひしと身に迫る思いである。斯様なことを申し上げると一見、今回の先生の受賞と大きく矛盾するかのように思われるが、私は決してそうとは考えない。林先生の持論は「日本蚕糸業は国の保護育成によって余りにも長く経過してしまった。という歴史が今日、非常なわざわいになっているんだ、この点を早く改め、自立態勢を確立せねば//」と常に警鐘を発しておられた。これは日本蚕糸業の今後の方向づけに大いに貢献するものと思う。勿論先生の今回の受賞は下記功績概要にみられるが如く、各般の業績の蓄積が受賞という結果をもたらしたことは言うまでもない。ことについて聞いた話だが千曲会顧問、相談役の懇談のさいも信州大学一般教育部統合問題について昭和37年末にも話題となったさい、林先生は千曲会とし

ては一般教養部をもつことを守ることが望ましいが、現在としては学部側が真剣に討議しているから運動を起すときではない。それよりもできるだけ早く大学院(修士課程)を設置するような対策を講ずべきであるとして学部部に申し入れ、小泉学部長ら関係者の努力によって現在大学院設置が実現していることは周知のとおりです。以上この機会に、比較的理解されていなかった林先生の先見性について一言し先生の御冥福を祈次る次第です。

功 績 概 要

大正5年上田蚕糸専門学校を卒業、同年純水館製糸所に入社、同9年同所を退社、母校の要請により、上田蚕糸専門学校校助教授として製糸の教鞭をとり、昭和2年同校学教授となる。その後昭和21年官制改正により、上田繊維専門学校教授同24年信州大学教授を併任、同33年には信州大学繊維学部長に就任、転換期にあった繊維学部発展のため貢献した。昭和35年停年制により退職したが、在職中に41年に及び、この間外務省の対支文化事業による日華親善旅行、文部省の繊維事情調査団として満州、中国に出張、さらに文部省在外研究員として生糸検査及び格付法の調査研究、並に生糸加工業の視察のため渡米、帰朝後「製糸読本」「蚕糸読本」「製糸」等の著書を出版、現場技術者の技術向上につとめ、戦亂期を迎えても蚕糸研究を続行、特に戦後は日本蚕糸業の在り方について真剣な検討をつづけた。昭和30年学術奨励審議会、同32年には日本学術会議会員に選ばれ蚕糸業界の発展ならびに蚕糸研究助成面に活躍、その後同33年長野県科学振興会審議会委員を委嘱され地方の科学発展に寄与した。同34年大日本蚕糸会評議員、ならびに日本蚕糸学会副会長の要職を兼ね、常に日本蚕糸業ならびに蚕糸学の発展に努力、さらに研究面では製糸技術の根幹をなす線糸張力の研究を大成した貢献は大きい。(昭和40年5月10日)

千曲会臨時総会議事録

昭和40年7月11日午後1時より
繊維学部第1会議室

1. 開会のことば 田口理事
2. 理事長挨拶 総会開催の理由—東京支会の要請による、教養統合についての報告と蚕糸統合については一部の者しか知らず、後者については教官会議にもはかってないのでその点含んで討議してほしい。
議事運営について都合により第4の一般教養統合に関する報告が行われた。
3. 一般教養部統合に関する報告(理事長)
昨年11月23日通常総会において統合反対の動議があり(上小支会)決議を行なった。
12月21日 上田市議会場で統合反対の意見書を決議された。
2月5日 信毎紙上に単科問題の記事掲載さる。

- 3月31日 教官会議において票決、1票差で反対と決る。
- 5月中旬 統合に対する文部省の態度がきびしくなる。
- 6月6日 理事会を開き情勢急変を報告。
- 6月7日 教官会議で再審議、票決、統合に決定。
- 6月17日 理事会開催、21日臨時総会の可否を評議会にはかる(書面にて意見を求め賛否を問う)
- 6月28日 評議会の決定(開票)により7月11日臨時総会開催に決定する。
4. 学部長挨拶
名誉会長としてでなく学部長としての挨拶という前置きで千曲会報7月号に掲載と同様の説明あり、要旨は次の通り、今回の統合問題には本質的に2つの問題があった。①国の文教政策。②学問問題である。
 1. 国の文教政策としては新制大学の教養は1ヶ所で行うという強い基本方針があったこと。
 2. 学内問題としては統合に対する意見が賛否両派に分れ

常に一致しなかった、統合反対にきまるときも一票差であり、再審議の結果賛成となった。

統合反対の唯一の論拠と思われる単科問題も最近の学部の発展に則応しようと思われず文部省も色よい返事はしなかった、そして学部教官の質からみて単科は無理と思われ、また学園ムードも工学部への移行希望が圧倒的である。以上要するに学部長としては学部をよくするために行ったことであり、千曲会の意向に反する結果になったが、諒解して欲しい。

議長 選出 議長 鈴木玄九 (兵庫支会)
副 坂本勝三 (安筑〃)

議事録署名人 委員 窪田作水, 石川 博

議 題 信大繊維学部一般教養課程統合について

鈴木議長 東京支会の提案議題であるため同支会より提案理由の説明を願いたい。

斎藤義 (東京支会) 昭和24年文部大臣認可のもとに教養が上田に併置され、現学部長も本学部は特色ある大学と強調され昨年本総会で統合反対決議がおこなわれた、ところが教官の投票で統合が実行された、教官の質的な問題があるとのことであるが、一応単科を夢みてきた者にとってこの決定は不満である、そして本会の決議にたいし幕を如何に引くべきか提案する。

母袋副理事長 議事に入る前に名譽会長としての挨拶を願いたい。名譽会長であったはずの学部長がこの挨拶で述べられたことは今迄我々が聞いてきたこととは全く相反している、小泉学部長 名譽会長として挨拶する必要はないと思う。

母袋副理事 学部長としての挨拶は名譽会長としての今迄の挨拶とは大転換である、今回名譽会長として挨拶がなければやむをえないから撤回する。

猪坂相談役 教養統合問題は過去の問題となった、専門と教養課目についてアカデミックなものにというのは如何に解釈するか疑問であるが、大体の学部長の主旨には賛成する。そして統合に踏み切らざるをえなかったこともやむをえないと思う、しかし今後の問題として、学部の将来を決定する大問題を教官のみの決議にまかせてよいかどうか納得できない。学部管理に卒業生がどの程度関与できるか考えてみる必要がある。即ち千曲会は決定権を持たず圧力団体のような感を与えているが、上田市民、5,000の卒業生、関係業界といった大きなバックもあることであるから学部管理は重要である。母袋氏も学部長が君子豹変したかのように云われたと思うが千曲会をより発展させるためにも前むきの姿勢として考えて貰いたい。

蒲生顧問 学部長も名譽会長としてのしつかりした考えをもって貰いたい。当時の言葉は独立はベビーブームという絶好のチャンスであること、本学部は工学と農学の間にあるため伸びられないから独立したいとのこと、またさらに東信地方は絶好の学園都市であることを主張されていた、そこで私はここにある大学を充実すべきであると考え関係方面に意向を打診し本会の決議に忠実に邁進したつもりである。

小泉学部長 前にはそのような考えをもっていたが、学部長としての立場は非常にむずかしく票決ではたえず半々としてでなんと決定できなかった。学校をよくするために行ったが学内状況は全くむずかしい状態にある。

山口理事長 学部長は名譽会長であると同時に卒業生である私も理事長であると同時に教官でもある、このようなことのため学部長の立場からはまだ云えないことも多いと思う。

加藤 (安筑支会) 統合については終止符を打って欲しい。

渡辺 (三丹支会) 4月の時点では参加しない、このことは本学で理解されたというのであれば学長、事務局長はなぜ文

部省へ報告しなかったか。

田口理事 繊維は信大の一員である限り一般教養統合、文理学部改組、教育学部統合の三本柱について協力すべきで、文部省ではこの点で問題にしないであろう。教育学部へは入学定員削減を指令してきており、このため松本分校は出血することになるが繊維はその責任をとるかとの質問があった。信大では繊維が議決を持ってきている以上受入れることはできないが将来入るものとして文部省と折渉したと思う、現に本部では繊維の入らない状態で計画を進めてきた、ところが直接繊維と文部省との折衝は今迄我々が考えていたものと全く反対のものであった。予算人事は教養部長が行うことになっており、そのため上田へは駐在する形になる、その結果信大中にあって専門を充実させるためには統合せざるをえない。

北条理事 教育効果の点で統合が今よりよいと決定したわけでない、そのため実効の上までは千曲会の決議を撤回すべきではない、米国は教養を4年間に渡って行っており、教養をとりもどしたいといっている大学もある。

湯原 (高知支会) 教育は人間と人間とのつながりであると思う、教官と学生とのつながりを密にした学校運営を望む。

笠原義 (上小支会) 北条氏の意見に賛成。

渡辺 (三丹支会) 決議の旗じるしを下さない北条氏の意見に賛成。

江口 (近畿支会) 一般教養統合は教育がよりよくならなければ反対である。

岩下 (栃木支会) 1年間の教養には問題があるが、半年間をこちらで持つならば、これをより充実するよう学校側に要望する。

北条理事 運動することはプラスにならない、学校側で決ったからそれに従うというのではなく、今後の問題に含みを残す程度にとどめるべきである。(全員賛成)

鈴木議長 決議案文は理事会へ一任することで①議案は可決した。

(註) 7月23日開催の常任理事会において次のように議決した。

千曲会は一般教養の参加については教育効果の認められるまで反対の意志を撤回しない。

議案 2. 大学における蚕糸学関係学科の教育のあり方について

鈴木議長 東京支会より提案理由を説明された。

斎藤義 (東京支会) 上田、東京、京都の三校の蚕糸学関係を一ヶ所に統合することを聞いているが、上田へ統合すべきであると思う。上田に統合することを提案する。

山口理事長 この問題はまた教官会議でも末審議である。辛い繊維農学科主任松尾、紡織工学科主任の荻原両先生が文部省の実情に詳しいので説明願いたい。

松尾理事 文部省から蚕糸統合答申案が出るまでの経緯について報告、その概要は本学では昭和36年養蚕は繊維農学科に製糸は紡織工学科の原科学講座と機構を改め現在にいたっている。このようになった理由は昭和34、35年頃養蚕学科は入学定員を割り学生の質が著しく低下した。製糸では卒業生の大部分が蚕糸部門に進まず他産業に進出した。同じ頃東京は製糸を工学部(繊維学部)に残し、養蚕を農学部へ移行改革を行っていた。その後業界は純粋な蚕糸教育を要望するようになり、文部省は縮小する立場をとった。この両者の要求が偶然一致して今回の答申となったと思う。その内容は三校が統合して農学部内に蚕糸学科を編成し、養蚕コース、製糸コースとして14講座(うち4講座は研究所)とする。この実施案

は40年度中にまとめ、41年度概算要求、42年度発足入学者を入れる予定になっている。この案に対し京線は全面的に反対東京(工学部)製糸は反対、養蚕(農学部)は賛成、上田不明となっている。さて本学部内としては学内の将来計画がなおあいまいであるが、繊維工学部にしなければ学部は発展しないという空気が80~90%を占めている。また別に蚕糸に関する学部をつくることについては自信がない。農学部で蚕糸教育を行なわなければならないという理由は例えば工学系にあったのでは後継者を養成することが出来ないことである。したがって残る問題としては文部省案に乗り工学系学科へ学科内容を変えてゆか、またはこのままもっていくかであるしかしこのままといっても体質改善をせまされ、いつまでも蚕糸を残すことは非常に困難である。

野田理事 文部省案内容が分からない人のために内容一部説明があった。

荻原顧問 この答申案は委員会の議案であるとの解答があったが、三大学の関係者が集って協議し最終案がつけられることになると思う。

蒲生顧問 文部省の答申によれば農学部におく方が便利であるとされているが、この委員諸氏はこの道の専門家ではなく農工別の立場から考えたものである。実状は製糸の自動化、養蚕の機械化はすべて本学の卒業生諸子によって行っておりむしろ工学系にある方が蚕糸学の発展には望ましくらしいに考えられる。願わくば困難でもあらうが再検討して是非上田へ統合されたい、その点千曲会全員の賛同を期待したい。

香山(上小支会) 上田に今日の大学があるのは蚕糸業の業績があったからであり、蚕糸がなければ上田に繊維学部をおく必要性はない。上田に蚕糸を置きたいし残したいが、ところが学内ではそのような空気はないことは事実のようだ。

井沢(上小支会) 蚕糸をやっているのは三繊維大学ばかりではない、蚕糸学を作ったのは東大の先生であり、農林省蚕糸試験場長は東大出でなければならぬ。そこで蚕糸学は学問体系として成り立ちがたいから繊維農学の一部として蚕糸方面に向く者を養成すればよい、養蚕製糸をやったからといって蚕糸業へ進むとは限らず、基礎教育をやった者の中から蚕糸をやった者を出せば良い。例えば講座をもうける程度でもその道の専門大学を出たものより優れているものを出したらよい、後継者は他大学より優れた人材を作ればよいと思う。

猪坂(上小) 答申案起草委員の選出は如何にされたか。

松尾理事 文部省で選出したと思う。

猪坂(上小) この統合の決定権はだれが持つか。

松尾理事 現在の大学管理方式ではこの教官会議で決まることになる。

猪坂(上小) この案に乗るか乗らぬかをこの教官会議で決めるとすれば蚕糸以外の大多数の教官会議であるから結果は自ら明らかである。

松尾理事 全く明らかである。即ち学部将来計画が工学部を志向しているとすれば否決されることは明らかである。

斎藤義(東京支会) 学部長の考え方を聞きたい。

小泉繊維学部長 松尾卓見氏の意見と同様である。この学部で蚕糸教育をやる事は甘く考えられない。

斎藤義(東京支会) 最近同窓の先生が少くなり、学内の教官同志でも溝が深まってきている。三者(学内教官、業界、卒業生)の話し合う場をつくってはどうか。

小泉学部長 今の話しは前年私が提案した。両者の交歓を深める必要がある。支会総会にも広く賛助員の先生に出席してもらい話し合う外ない。

高村(神奈川支会) 時代は変わったが過去においては学科名が非常に大きな影響をもっていた。これからの大学は時代の波

に乗りおくれぬよう教育して欲しい。

鈴木議長 結論を出しては如何。

猪坂(上小) 放っておけば文部省の案にしたがうことになるがこの会議はこれを阻止するためのものではないか。

小泉学部長 自分は現場の者を呼ばずこのようなものを作るのには賛成できないということを文部省にいったが、文部省では蚕糸学に対するビジョンを作りたいたのだといっていた、村山審議官はこれを強制する考えはないといい、又宮山科学官も最終案ではないといっている。しかし我々の方に強力な案がなければこの政策をとる可能性が強いと思われ、9月に文部省に文書回答しなければならぬ。この教官会議の空気では蚕糸教育を強く残す可能性は全くない。

母袋副理事長 この問題について長野県会で質問した。知事は長野県農政のあり方として蚕糸には非常な関心を持っており、重大問題だと思つておいた。そして長野県に持って来るよう努力するといっている。

猪坂(上小) 知事と蚕糸業審議会で議論する。文部省案を阻止することが出来ると思う。そのため教官会議の線と反対の結果になると思うが、それでもよいのか。真剣な研究を期待したい。

松尾理事 繊維工学部の考え方の強い折だけによほど考えないと独走しては困る問題である。

江野村(山陽支会) 時の流れを千曲会がよく知らなければ批判をうけると思う。

猪坂(上小) 蚕糸業軽視の問題であり、ただ一県だけの問題でなく重要問題である。

斎藤義(東京支会) 上田に設置することを前提に具体案を練るべきだ。

関理事 時間をかけても斎藤氏の意見を聞くべきだ。総会は幾度も開催できるものではない。したがってこのような問題は充分時間をかけて討論すべきである。

岩下(栃木支会) 多くの農学部では方向性を出したため失敗した。文部省では大学自治ということ強調するのが常である。それよりこの教官会議の決定が問題であるから千曲会員出身教官の反省を期待したい。即ち蚕糸は弱くなっているという現実を目をむけるべきだ。三者の話し合いにより上田における蚕糸学の方向性をきめていただきたいと思う。なおこの答申案内容は時代おくれの感じがある。

松尾理事 学部教官の意向で決るのであるから三者の話し合いが必要である組織をつくるならそのような場をつくって研究したい。

井沢(上小支会) 蚕糸の学問をおくことは学部の将来方向を阻害するかの様な感じをうけるがどうか。

松尾理事 将来学部がどのように行くかでこの問題は決ってくる。農学士、工学士両方を出すような学部では駄目で、学部の発展のためには工学士のみ出す学部になければならないという意見が圧倒的である。これに勝てる議論でなければ駄目だ。

井沢(上小支会) 農、工学士の両方を出していけないというのはどういうことか。

松尾理事 時代の評価は工学、産業工学、繊維工学、農学の順になっているということらしい。

井沢(上小支会) 農学関係の先生には大いに勉強していただいて農学も必要であることを再認識していただきたい。

鈴木議長 長時間にわたって研究していただいたので次の議決をもってこの会議を終りたい。(一同異議なし)

◎大学における蚕糸教育改善の在り方については学内教官、業界、卒業生などで研究会をつくり充分検討する必要がある。

臨時総会の顛末を聞いて

東京支会 H M 生

去る7月11日には千曲会としては稀な臨時総会が開かれた比較的若い層の会員の積りなので、評議員であることもうかつでいたが、その評議員会(書面会議)の要請によつての臨時総会であるから、要件の緊急さと重大さはもつて知るべきである。もとより書面にも開催の趣旨と議題が二つあつてあつた。即ち

1. 信州大学における教養課程統合問題

2. 大学における蚕糸関係学科の教育のあり方について

いづれも母校を今日まで築き上げてきた礎石に関する問題である。その1については昨年の定期総会の決議から始まつて、前々から会報に学部長ほか1~2の論者が論説し、その帰結が案ぜられていたところであり、さきの評議員会通知でこの二番茶劇のどんでん返して結論がでたことを知つたが、これにはフェアでない微妙な問題をはらんでいるのではないかと、その2については昨年ちよいちよい耳にしていた所謂3組織学部の蚕糸学科の統合整理問題がいよいよ文教政策として検討が始められたものと感ぜられたので、今度の総会には代議員をかかつて出たいと思つていたが遂その機会を得られなかつたので、出席代議員からの報告を聞いた小生の感想を述べてみたいと思ふ。

名誉会長辞退のこと

会次第は型通り次のようであつた。

1. 開会のことば
2. 理事長の挨拶
3. 名誉会長の挨拶
4. 一般教養統合に関する報告
5. 議長選出
6. 議事
7. 閉会のことば

会長の来席がおくれたので、報告が先になつただけで他に誤記もなかつたが、奇異なことには理事者は御本人の意向で「名誉会長挨拶」を「学部長挨拶」に訂正したと云う。本人がどんな底意をもっているにせよ挨拶の仕方でもうにも現わせると思われるが、ことさらに訂正の了解を議場に求めたのは意味があつたためであろう。

小泉学部長は前林学部長の後を継がれて以来名誉会長も御受けになつてはらずであり、今までの総会も凡て名誉会長として挨拶されてきている。にもかかわらず今回に限つてなぜ名誉会長の名を避けたか。のみならず議事に入つてからも副会長M氏の質問に対する答弁で、名誉会長なんか迷惑千万で辞任するとまで云われたそうである。

かりにも同窓会総会の席上で、たとえ立場はちがうといえども母校の長として、そんな不思議なまた尊大な言葉がまかり通つていいだろうか、列席者は皆然然として一人としてそれをただす者もなく、最後に北奥支会からその言葉の撤回を求められたが、答がなかつたそうである。これは議事外の派生問題として理事者の措置に待つとするが、定款はもとより会の本質に触れる問題であることを全会員が確認すべきであろう。

秘密会議とかのこと

議事の初発に副理事長のM氏が教養統合問題についての名誉会長としての見解をただしたのに対する答弁が同窓会を非難し無視するよきな言ひ方もあり「名誉会長は辞める」と言うほどの今までにないさかさ殺気立った空気の会になりそ

うになつたそうである。ある代議員から「うちわの会ゆえなごやかに」とこれも異例の発言があつたほどで、さきゆき心配した理事長は早速立つて「この部分には秘密事項にしたいがどうか」との劇的展開があつたそうである。それが母校の一大転期にある重大時点における同窓会総会の議事の頭首であるとは奇妙な情景であつたらう。

そのようなシーンにしろ、たとえどのような異常な総会にしても総会である以上は秘密会議にすることは出来まい。会社の株主総会にしても凡ての総会は公示的性格をもつてゐるものである。理事長はなんでそんな発言をしたのだらう。議長はそれを別に動議としてとりあげなかつたそうであるから代議員としては拘束されずに支会に帰つて報告もしようが、千曲会報による全会員への広報も当然なされるべきである。

教養統合の議題

前記1号議題は昨年の総会で議決になり、同窓会の意志は決議文として学部長、学長に表明してあつたことは知つていた。ともあれこの問題の決定権は学部教官会議にあることであり、同窓会のどうにもならないことであるにしても、過去において同窓会が絶大な使命をかけて獲得した既得権を放棄するにはそれ相応の価値ある理由を聞かねば納得できないしまた学部の長年月に亘る研究の結果の最終会議で決定した学部意志が非常識にも「一事不再理」の法則に反して再検討の結果反転して白が赤となる結論となつたと云う、およそ選良の府や学識の集会には考えられないし起り得ないことである。

この議題に対する列席者の気勢は低調で、己に決つてしまつたことなら今更どうもなるまいとの諦観が支配的だつたそうであるからあれこれ云うまい。ただし結論として誰か学内理事が云われたそうだが、「同窓会の意志と学部のそれとは遺憾ながら一致しなかつたが、統合がよかつた」と云う実証があがるまでは旗印は下さない」と云うことであらう。

蚕糸教育の議題

蚕糸行政の一端をも職とするので蚕糸業界と蚕糸教育面との歩調不均衡は何か手が打たれるべきだとは考へていたがいよいよ文部省は蚕糸教育の統合整備案なるものを打ち出したので、従来蚕糸教育の主流となつていた上田、東京、京都の三組織学部では急きよ真剣な研究が始められたものとみえる

この議題こそ臨時総会の中心討論になるだらうと思つていたが、様子聞いてガツカリした。文部省から出た諮問案なるものが2-3ヶ月も前に出ているのに会報で知らせもせず席上配布も全員に渡らず、加えて学内理事の説明は案の内容には殆んど触れず専ら母校の将来計画は工学偏向にあるので農学を基盤とする蚕糸教育の合理化には自信がもてないと云うような学内事情の釈明に終つたか。この議題は会員の最大関心事である母校の将来像を激変する事柄であるにかかわらず意見が沸かなかつたのは、出席代議員諸氏が予備知識に乏しかつたことや、討論の時間が少なかつたことや、9月までに学部の態度を決定するんだ(説明)と云う余裕期間があることにもよつたのであらう。だから結論としては只「委員をあげて研究する」と云うなまぬるさであつたそうであるが大部分の会員にとっては一議題よりも直接的で切実感のにじむ問題であると考えるので、この際母校に対しては特に慎重な態度を強く要望するとともに同窓会は同窓会としての、また業界人としての見解態度を結集して側面的運動を展開すべきであらう。

千曲会臨時總會出席者

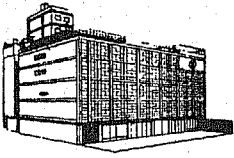
- | | | | | |
|-------|---------|-------|-------|--|
| (北 奥) | 和田 敦 | | | |
| (山 形) | 大工原 健 | | | |
| (茨 城) | 伝田 敏夫 | | | |
| (群 馬) | 小平 一彦 | 猪坂 哲郎 | | |
| (埼 玉) | 久保田康夫 | | | |
| (栃 木) | 岩下 嘉光 | | | |
| (東 京) | 小泉 辰雄 | 斎藤 幸夫 | 斎藤 義臣 | |
| (神奈川) | 高村 弘 | | | |
| (千 葉) | 境沢 正人 | | | |
| (北佐久) | 土屋茂一郎 | 大山 融 | | |
| (南佐久) | 松永 省吾 | | | |
| (上 小) | 北条五郎右衛門 | 井沢 喜三 | 笠原 義人 | |
| | 川上 保人 | 和田 晋 | 浦生 俊興 | |
| | 笠原 正巳 | 田口 玲 | 倉沢 美徳 | |
| | 西沢 正一 | 窪田 作水 | 倉沢 秀一 | |
| | 島田 林助 | 猪坂 直一 | 香山 清和 | |
| | 母袋忠右衛門 | 桜井 隆夫 | 伝田 静夫 | |
| (更 埴) | 宮城 博 | | | |
| (北 信) | 松沢 宗一 | | | |
| (安 筑) | 加藤秀次郎 | 倉沢一二三 | 坂本 勝三 | |
| (愛 知) | 稲垣 厚 | 鈴木 薫 | | |
| (石 川) | 斎田 新次 | | | |
| (三 重) | 鈴木 正晋 | | | |
| (京 滋) | 林 秀門 | | | |
| (近 畿) | 江口 晴雄 | | | |
| (三 丹) | 渡辺敬一郎 | | | |
| (兵 庫) | 鈴木 玄九 | | | |
| (山 陽) | 江野村一雄 | | | |
| (高 知) | 湯原 清 | | | |
| (徳 島) | 村田 一由 | | | |
| (学 内) | 小泉 清明 | 山口定次郎 | 野口新太郎 | |
| | 萩原 清治 | 三石 賢 | 小林 勝 | |
| | 田口 亮平 | 坂口 育三 | 田中 茂光 | |
| | 竹田 寛 | 白井 美明 | 山崎 晋録 | |
| | 町田 博 | 古平 福紀 | 北条 舒正 | |
| | 小林 尚一 | 松尾 卓見 | 石川 博 | |
| | 押金 健吾 | 関 博夫 | 青沼 茂 | |
| | 遠藤 恒久 | 小山 長雄 | 金井 清 | |
| | 田中 一行 | 大谷 隼人 | 美斎津利正 | |
| | 滝沢 達夫 | 白井 要範 | | |

岡庭武治君を悼む

昭和40年5月27日級友岡庭武治君は交通事故により、52才を1期として悲しい最後を遂げられた。同君は事故当日またまた台風6号の警報が発令されており、その対策協議のため勤務する勢多郡富士見村農協の常務理事宅へ早朝バイクで出向いた。その途中7時40分頃赤城県道大正用水附近において前方を進行中の桑切りにいくオート三輪を追い越そうとした際に、わずかに接触する程度の衝突をして路上にはねとばさされてしまった。直ちに前橋市内のさる病院に運ばれて手当を受けたが、傷々しい外傷は一つもないのに事故時における路面への頭部強打により、脳内出血をおこし意識不明のまま11時10分には息を引きとった。夢というか全く信じられないような最後を遂げてしまったのである。同君は学校当時も病気が知らずの元気で、応召中や敗戦によりンペリヤに抑留中も幾度か死の危険にさらされながら頑張り抜き、復員後は群馬県養連、勢多郡養連に奉職し、昨年からはその識見力量を嘱目されて年間産額が約60万キロという群馬県で最も養蚕の盛んな富士見村農協に転じ、これから大成期に入ろうという時にこんなことになってしまったのである。惜しんでも惜しみきれない痛恨事であり、御遺族に何とお悔み申し、お慰めしてよいかその言葉を知らない。


同君は初印象が人を食ったようなところがあり、ややもするとその人柄を誤解されるようなことがあったかも知れないが、芯には誠意と温かい友情とそして曲ったことの嫌いな直情の持主であった。また仕事の面では一見鷹揚のようであるが、決してツボを外さないという卓越した技術的識見と強い責任感そして常人の及ばない指導力を持っていた。事故当日も本年春蚕期の異常気象に加えて台風の襲来とあっては蚤作に及ぼす影響が大きいかを心配し、仕事に対する熱意と責任感から早朝に上司宅へ出向いたことを関係者から聞き及び全く頭の下る思いであった。このことは30日の葬儀において同君の急逝を惜しみその業績をたたえた多数の弔辞と夥しい花輪の数がはっきりと物語っていた。私はただただ合掌して同君の冥福を祈るとともに、御遺族に対し心から哀悼の意を表する次第である。(蚕23, 竹内)

追記 御遺族は令閨こと様と康夫君(中学1年)の二人で住所は前橋市北代田町546の2である。



皆様の百貨店

上田・中央 **ほてい**



オルガン ミシン針

長野県小県郡塩田町

オルガン針株式会社

TEL 塩田650

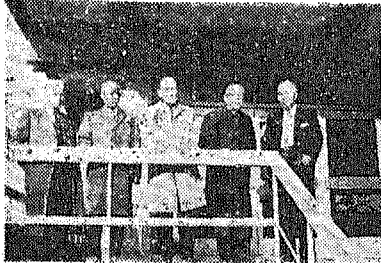
社長 増島芳美

さ ろ ん

糸二期生の同級会

糸二期生 沖 濤 治

5月1日神石市須磨荘に於て糸二期生の同級会を催した。糸二期生と云えば明治45年4月入校、大正4年3月卒業したと云う70才以上の老人の同級会である。実は数年前から此の会を持ち度いと念願していたのだった、昭和35年母校50周年記念祭に同期生4名が参加したが其の折りに何日か全員の会合を持ち度いものと話し合った、そして全員の出席に最も都合のよい地として神戸を選んだのだ、其の当時病後で旅行不能であった僕の為に特に僕が出席出来る地としての意味もあ



つたらしい、其の後宮田君逝き、矢田部君、岸君等の訃報を耳にするにつれ最早や其の機を逸してはならぬと思ひ是が非でも今年こそは決行しようと大箸君等と相談り5月1日会合と予め決定し其の上で2月頃から各氏のご都合を伺い参加を勧誘した処最小6名参加が確実となったので、いよいよ決行することにした。因に糸二期生の入校者数は当時33名だったのが現在の生存者数は僅か10名で恐らく

死亡率の最も多いクラスではないだろうか、処が其の内6名が参加すると云うのだから出席率50%以上と云う好成绩である、処が何んと皮肉な神の悪戯か4月26日になって発起人の1人である大箸君から「病気で行けぬ残念」との電報を受け取った。瞬間どうしようかと聊か迷ったが、最早や変更の余地はないので其のまま開くこととし、こんなことには全く不馴れな僕1人で万端の準備をしなければならなかった。斯くして4月30日には東京からは永井榮君が夫人及び令息ご同伴で豪華な関西観光を兼ねて来神せられ、京都府下からも岡田康三君が白髪のお爺で現われた。共に50年来の初めての再会でお互に乗るまでは一寸誰だか解らぬ程だった。九州からは甲斐斐君が万障を排して元気のよい姿を見せてくれた。上田からは細川三郎君が遠路わざわざ馳せ参ぜられ、午後2時迄に5人全部打ち揃ったわけだ。久滞を述べたりお互の元気を喜び合ったり、其の後の話題は豊富で尽きる所がない、甲斐斐君はゴールデンウィーク中非常な多忙な日程（近親の慶事など）を組まれて居り残念乍ら参加出来なかった。木内、見波、湯浅三君は都合つかぬ旨お手紙を頂いた。戸田君は御長男の要一君（蚕32回）から昨年4月御他界の旨返事が参り一同驚き入った次第で、一同で同君の冥福を祈った。尚甲斐斐君から50年前の大正4年4月16日に大箸君から貰ったと云う長い長い毛筆の手紙の写しを送って来られ一同若かりし50年前の動静を懐古して興深かったが、よくも肇君がこんな古い手紙を保存して居たもの一同驚かされた。

夜は僕の子供達が「父が学生時代よりずっとお世話になっている旧友達が四方から集まって来られたのだから、此の機会に子として感謝申し上げると共に歓迎の微意を現し度い、就ては御迷惑ながら第1楼と云う支那料理店まで移って頂き度いとのことで自動車走らせ移ることになった。一同老体乍らも談論風発盛んに飲み且つ盛んに食いつつ上田時代の青年に返って飯を尽くした。同夜は須磨荘に枕を並べて深更までなつかしい懐旧談に耽り、翌2日には車を運んで六甲山にドライブすることにした、六甲山は瀬戸内海国立公園の1部で英人により開拓され今や神戸市はドライブウエイとして登山道路を完成し為に新緑滴るくねりの坂道をドライブする心地又格別で楽々と頂上まで登ることが出来た。殊にこの六甲山は夏期の気温低いため登山者多く、本日も市中の桜花散り果てていたに拘らず当山の桜も満開の頃で登山客は又非常に多かった。斯くして此の頂上で神戸の風光を一望に見下し得るレストランで昼食をとり六甲山の景観を満喫した。そして午後3時頃三ノ宮駅に於て再会を約し硬く握手し健康を互に祈り合つて別れた。来年は糸二期生のみならず何科、何回卒を問わず70歳以上の元氣者一同の会合を催して母校訪問でも企てたら如何ならんかとの話も出たが扱て参加者幾何あるだろうか、大方の御賛否も伺い度いものである。以上原稿の起稿に当り大箸君より色々な材料を頂きましたことを記し茲に感謝の意を表します。(写真も当日須磨荘で撮影したもの)

本 会 記 事

理 事 会 開 催

6月17日理事会を千曲会館に開催、出席者は山口理事長外理事、顧問、相談役25名出席、山口理事長議長として議事を進めた。①評議会開催については、東京支会から母校一般教養部の統合反対の決議は昨秋の総会で決定したので、この結果報告については臨時総会を開催するよう意見があった。定款によって評議員会を開催して決定すべきであるが、日時的にその余裕がないので評議員に書面協議することによって臨時総会開催の可否を決定することになった。開催が決定した場合は大学における蚕糸学関係学科の教育のあり方についても議題として上程することに決定した。

上田繊維科学振興会役員会開催

7月12日上田繊維科学振興会役員会を開催次おとおり決定した。①理事長、副理事長、常務理事の選出について協議の結果、理事互選によって新理事長に会田

源作氏が、副理事長に北条舒正氏が、又常務理事には田口亮平、小林尚一、村上尚、隅田隆太郎、小山長雄の各氏が選出された。②事務引継ぎについて、柳沢前理事長から40年度事業のうち研究助成については既に施行済みであること。学界講演会事業計画について事務引継ぎがあり事務については5月27日監事会が行われたので財産目録の基本財産の保管状況関係書類の事務引継ぎが行われた。③顧問推戴については本会を公益法人組織の財団法人設立認可に功績のあった柳沢延房前理事長を顧問に推戴することに決定した④評議員の推薦については9月号に氏名掲載の予定。

千 曲 会 費 完 納 者

今回次の会員は通算会費40回完納された。本会向上発展のため多大のご協力いただいた事を感謝いたします。(敬称略)

- 林 秀門 (糸19・京滋)
- 内川 勇 (蚕13・愛媛)
- 伝田 静夫 (蚕21・上小)

母 校 ニ ュ ー ス

学 内 人 事

- 一般教養部生物学研究室 小山長雄、同化学研究室横井政時両助教は7月1日付文部省発令により信州大学教授に昇任された。
- 一般教養部生物学研究室 清水建美、同英語研究室高橋規矩両講師は7月1日付文部省より信州大学助教授に昇任された。

中島遷事務官

信大教育学部事務長に栄転
信州大学本部勤務の元母校庶務係長中島遷事務官は7月1日付文部省発令により信州大学教育学部事務長に昇任された。

信州大学教職員

レクリエーション大会開催

織維学部当番により信大職員レクリエーション大会は7月24・25日両日学部において盛大に行われた。前日まで梅雨もあけやらぬ模様であったが当日は土用の暑さとなり各種目が予定通り行われた。

会 員 動 静

前沢 康雄 蚕 14 茨 城 私立水城高等学校 (住) 水戸市赤塚町403の7 電話水戸(5)9036

出野 正雄 蚕 23 京 滋 京都府民生労働部労働課 (兼) 京都府山科中小企業労働相談所長

北原 幸治 蚕 26 北 信 長野県長野西高等学校

有川 博 蚕 26 更 埴 長野県坂城高等学校定時制主事 (住) 長野県小県郡川西村浦野

西村 国男 蚕 29 北 信 長野県蚕業試験場養蚕部長

黒子 浩 蚕 31 近 畿 大阪府立大学農学部昆虫学教室 (住) 堺市大仙町

宮下 久吉 蚕 32 東 京 農林省農政局普及教育課教育班長 (東京都千代田区霞ヶ関2の1)

小林 一陽 蚕 32 山 陰 鳥取県米子市立第4中学校 (住) 米子市福市933

宇治川喜平 蚕 33 北 信 長野県蚕業試験場蚕種部長 (長野市岡田町)

中村 文雄 蚕 35 更 埴 長野県企業局戸倉上山田水道管理事務所長

大井 秀雄 蚕 36 熊 本 農林省蚕業試験場九州支場 (熊本県鹿本郡植木町岩野) (住) 熊本県鹿本郡植木町広住541

牧野 文雄 学蚕1 北佐久 佐久高等学校 (住) 佐久市岩村田)

長岡 俊男 学蚕7 上 小 依田川中学校 (長野県丸子町) (住) 丸子町長瀬3466

橋詰 強 学蚕7 諏 訪 長野県保育専門学校 (住) 諏訪市湖南水戸代水戸団地10号

臼田 迪夫 学蚕8 南佐久 長野県臼田高等学校 (住) 佐久市桜井135

和田 宗昭 学蚕8 竜 川 長野県辰野高等学校 (住) 辰野町1744那須野真一方

佐野 寛 機 1 愛 知 プラサー工業KK (名古屋市瑞穂区堀田通9の35) (住) 名古屋市瑞穂町苗代町2の2

岡本 栄一 糸 15 愛 知 有限会社知立鉄工所代表取締役 (住) 愛知県碧海郡知立町栄2の33

武者 忠彦 糸 22 安 筑 長野県梓川高等学校

(住) 松本市沢村町1799

篠田 鏡一 糸 28 愛 知 日本羊毛紡績会常務理事 (名古屋支部 (住) 名古屋市昭和区天神町2の16本二ビル302号)

笠井 忠光 学糸2 東 京 東京セロフアン紙KK研究部 (東京都足立区新田2の9の1)

中村 富隆 学糸5 山 陽 農林省中国四国農政局振興第1課 (岡山市東古松町)

松沢 栄 紡 12 東 京 日本メリヤス工業KK (東京都墨田区石原町3の29) 電話(622) 9835

萩原 博文 紡 27 山 陽 倉敷織維加工KK企画部次長 (倉敷市旭町650の1)

大谷 文夫 学紡2 福 島 呉羽紡績KK ナイロン工場 (敦賀市桜島町)

池田 嘉邦 学紡13 栃 木 昭栄製糸KK小山工場 (小山市本郷町5の39)

浪方 昌近 化 5 東 京 日本レイヨンKK東京事務所技術第2課長 (東京都中央区八重洲口八重洲口会館)

天野 定夫 化 1 京 滋 (住) 大津市松本1丁目12の22

羽村 信人 化 2 山 陽 鐘ヶ淵紡績KK 防府工場 (住) 防府市岡村町

下平 富夫 化 8 埼 玉 山陽パルプKK 東京研究所 (埼玉県東松崎東平)

小松 好人 学化6 近 畿 大阪府高槻市野田250 大和紡績社143

池田 絃二 学化11 近 畿 花王石鹼KK 産業科学研究所 (住) 和歌山市西浜大浦1130花王石鹼星和寮

編 集 室 よ り

暑中御見舞申し上げます。
臨時総会のさいは各支会からご出席貴重なご意見をいただき感謝いたします。
学部も真剣に研究した問題であり、本会も母校の歴史と発展につながる問題だけにとかく理に掉させば角がたつといった場面もあったが等しく大学の発展を如何にするか意図は同じであると思う。切に社会を見る眼の肥えた意見がとり入れられその実現を期したい。
編集委員 小林 尚一、竹田 寛、石川 博
武井 隆三、松沢 秀二、金井 清、一之瀬匡興
小笠原貞二、篠原 房江、白井 要範


為替のご用は

はやくて たしかな

富士をご利用下さい

千曲会へのご送金は、当店宛の振替貯金
口座長野3523が一番ご便利です

上田市原町

皆様の  富士銀行上田支店

特許・実用新案・意匠・商標

出願・訴訟・鑑定

浜 特 許 事 務 所

東京都港区新橋1の15の4
堤 第一ビル4階
東京(591) 0764・0765
弁 理 士 浜 香 三
弁 護 士 中 猪 之 助
千曲会員 福 島 鋼 治 郎